

JF 日本語教育スタンダードを利用したコースデザインの試み

Trial of Course Design Using JF Standard for Japanese-Language Education

郭 穎侠（香港中文大学專業進修学院）

要旨

本研究は Higher Diploma プログラムで日本語を専攻している日本語学習者対象のコースデザインの試みである。筆者は学習目標と学習活動と学習成果の評価を一貫性のあるものにするために、授業の具体的な目標設定と OBTL にそう評価という二つの課題で日本国際交流基金の JF 日本語教育スタンダードの利用を試みた。

キーワード： JF 日本語教育スタンダード；総合日本語；目標設定；評価

1. はじめに

香港中文大学專業進修学院では 2012 年 9 月から「応用日本語」（Applied Japanese Language）という日本語専攻の「高級文憑課程」（Higher Diploma）プログラムを新しくスタートしている。コース終了時点で日本語能力試験 N2 以上の日本語能力を目標としている。また、2011 年から OBTL（Outcome-based Teacher and Learning）を導入していて、2014 年にコースデザインを見直すことになっている。筆者は 2010 年からこのコースのデザインに参加し、全体の枠組みから個別の科目のティーチングプランまで携わった。そして、2012 年 9 月からこのコースの最初の科目「総合日本語 1」（Integrated Japanese 1）が始まり、筆者自身も授業を担当している。そこで、①学習者のニーズに合う個々の授業の目標設定、②OBTL に沿う学習評価、という二つの研究課題がまだ残っていることに気付いた。

そこで、2012 年 9 月に「総合日本語 1」の授業が始まると同時に、筆者は新入生全員を対象にアンケート調査と聞き取り調査を行い、その日本語学習ニーズとビリーフを分析した。その分析結果を踏まえ、日本国際交流基金の JF スタンダードを利用し、上述の二つの課題を解決する方法を探った。

1.1 JF スタンダード

日本国際交流基金は 2010 年に JF 日本語教育スタンダードを公開し、「相互理解のための日本語」を理念とし、「課題遂行能力」と「異文化理解能力」が必要であると考えている。JF スタンダードの活用事例は香港ではまだ報告されていないが、日本国内と海外にあり、プーリク、イリーナ（2010）など先行研究も発表されている。学習者の日本語熟達度の尺度として「CEFR の共通参照レベル」を採用し、「Can-do」文で示している。Can-do を利用すれば、具体的な学習目標を設定することもできるし、学習目標と学習活動と学習成果の評価を一貫性のあるものにすることもできると考えられる。

1.2 コースの概要

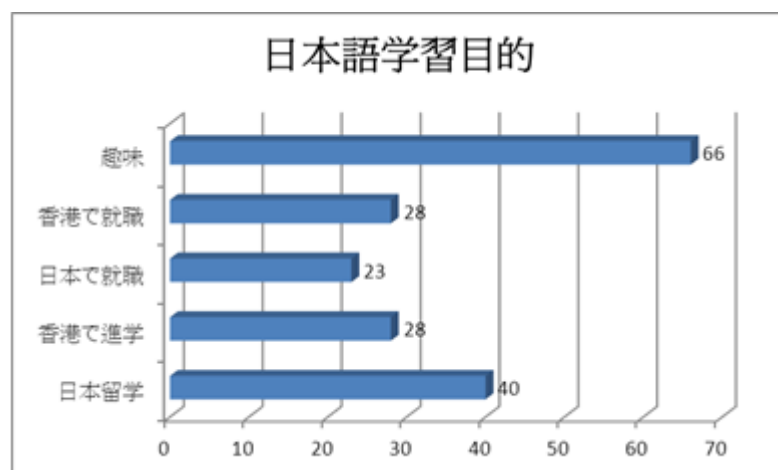
「総合日本語1」コースの対象者は高校を卒業したばかりの学生が中心で、2年間フルタイムで19科目（56単位）、計840時間の日本語授業を受けることになっているが、このコースでは合計120時間（週16時間）の勉強をする。コース全体の目標としては、終了する時点で学生ができるようになることを下記の3点設定している。

- ①ひらがなとカタカナを区別したり、読んだり書いたりすることができる。
- ②日常生活（例えば、願望、提案、経験など）に関する短い文章を読んだり書いたりすることができる。
- ③将来の日本語学習のために正しい学習態度と有効な学習方法を身につける。

2. 事前調査

コースデザインを目指し、学習者のニーズ、日本語使用状況、ビリーフを把握するために、コースが開始する最初の週でアンケート調査と聞き取り調査を企画・実施した。その結果、ニーズ分析では次のことが明らかになった。学習者の中で、「日本に行ったことがある」と答えた人は39%、そのうち64%が家族旅行、日本語能力試験に合格している人は（N3、N4、N5を合わせて）25%、在学中に日本に留学したい人は63%である。また、日本語学習目的は複数回答で、図1.のようになっている。つまり、当初設定した進学と就職のための日本語だけでなく、趣味のための日本語も取り入れる必要がある。そのため、個々の授業の目標設定に趣味などに関する内容や活動も取り入れるべきだと考えられる。

図1. 「総合日本語1」の学習者の日本語学習目的

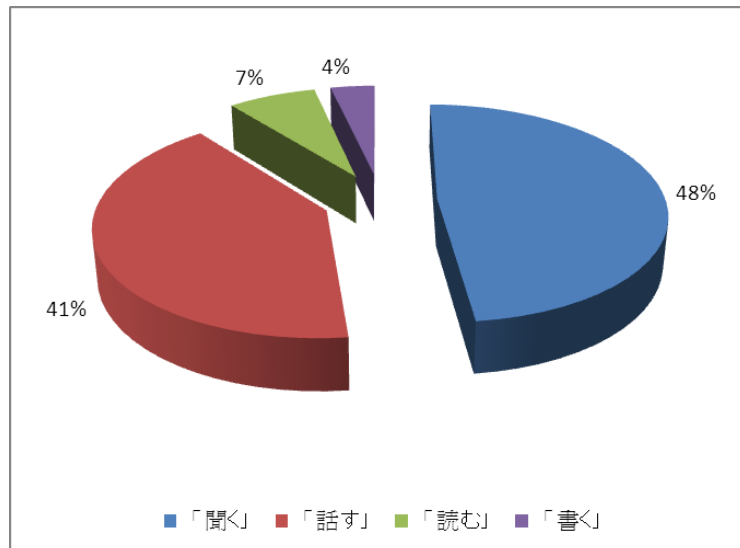


レディネス分析では、日本語学習経験がある人は73%、能力試験に合格している（N3、N4、N5を合わせて）25%で、既習の日本語能力があるいわゆる「false beginner」の比率が高いことが分かった。これは例年通りのことで、予想できたことであるが、学習を評価する際にどう対応するかが課題である。

ビリーフ分析では、「聞く・話す・読む・書く」の四技能の中で、「聞く」が一番重要だと思う人は48%、「話す」が一番重要だと思う人は41%を占めている。さらに聞き取

り調査で学習者が主に日本語のアニメ、ドラマ、歌、番組で日本語を聴いていることが分かった。四技能を均等に伸ばしたいという教育側の立場との矛盾を授業でどのように解決するかが課題であるが、「聞く」、「話す」に関する授業活動を多く設けると同時に、その授業活動の前作業と後作業でバランスよく「読む」練習と「書く」練習を設定する必要があると考えられる。

図2. 「総合日本語1」の学習者のビリーフ（何が一番重要か）



3. コースデザイン

「総合日本語1」のコースデザインに JF 日本語教育スタンダードを利用するにあたり、事前調査の結果を踏まえ、まず教科書を決め、それから各授業の目標と評価方法を考えた。

コースデザインの当初、教科書リストとして挙げたのは次のようなものがあった。同じ一年生のコースは2011年まで、オリジナル教科書「SCSで学ぶ人のための日本語」を使用していた。実際の香港での生活、香港中文大学専攻進修学院（SCS）での生活の中で使うような語彙と文型が中心で、「話す」授業活動が多く設け、勉強した直後に日本語で会話できるようになるのを目標にした教科書であるが、下記のようないくつか不十分なところがある。

①CDなど学生が自習に使える音声資料がないため、学生のニーズに合わない部分がある。香港の学生は小さい時からアニメ、テレビコマーシャル、ゲームなどで日本語の音声に馴染んでいて、中国語圏の「文字に頼る」より「耳から入る」というインプットに慣れている特徴がある。

②日本人の生活や習慣、文化、社会に関する内容があまりなく、日本にかんする幅広い知識を持ちたい学生のニーズに答えられない。

③書く活動がない。

④語彙が足りない。2年生になってからN2の準備や読解の授業で非常に苦労しているという教師の報告があった。

以上のことを踏まえ、「総合日本語 1」ではオリジナル教科書「SCS で学ぶ人のための日本語」を使用しないことにした。そこで、前述の事前調査で分かった学生のニーズと教育側の要望の両方に答えられるように、下記の項目を基準にテキストを選定し、“J Bridge for Beginners Vol.1.” (2007)を使用することに決定した。

- ①「聞く」、「話す」活動が多い。
- ②「書く」、「読む」活動も多い。
- ③多少難しいが重要な語彙を勉強できる。
- ④日本人の生活、歴史や地理など社会文化の内容もある。

3.1 各授業の目標

「総合日本語 1」は教科書として使用するの“J Bridge for Beginners Vol.1.” (2007)である。この教科書は言語習得理論を応用した話題重視の教材で、本文の中に読解・聴解・発話練習と作文練習が含まれている。授業で学習した文法や語彙を使って、何ができるようになるのかを具体的に示しやすく、著者の（小山研究室の）ホームページに「教え方のポイント」があり、各課の学習内容と到達目標が表示されている。次の表 1 はその到達目標を参考に「みんなの「Can-do」サイト」を利用して作成した第 1 課から第 7 課までの学習目標である。

「みんなの「Can-do」サイト」は日本語で何がどの程度できるかを「～ができる」という文で示したデータベースです、OBTL で要求されている目標づくりの際に非常に役立つ。日本語だけでなく、英語も併記しているので、英語の文書が要求される香港の日本語教師に非常に使いやすい。

表 1 第 1 課から第 7 課までの学習目標

レベル	種類	言語活動	カテゴリー	Can-do 本文	トピック
A1	活動	産出	作文を書く	友達（国籍、性別、所属、性格など）を紹介する作文が書ける。	人との関係
A1	活動	産出	作文を書く	自分と家族のこと（国籍、所属、職業、年齢など）を紹介する作文が書ける。	自分と家族
A1	活動	産出	話すこと全般	短い形容詞文を使って、ものの形状や特徴を説明することができる。	住まいと住環境
A1	活動	産出	話すこと全般	友達や家族の紹介(性格、好み、特技など)ができる。	人との関係

A1	活動	やりとり	口頭でのやりとり全般	クラスメートに生活習慣(何をどのぐらいの頻度ですか)について話したり、聞いたりすることができる。	住まいと住環境
A1	活動	やりとり	口頭でのやりとり全般	指さしながら身近にある物の名前を聞いたり答えたりすることができる。	住まいと住環境
A1	活動	やりとり	口頭でのやりとり全般	簡単な表現でクラスメートを誘ったり、クラスメートの誘いを受けたり、断ったりすることができる。	人との関係
A1	活動	受容	聞くこと全般	簡単な説明なら、CDを聞いて、地図で場所を探すことができる。	住まいと住環境
A1	活動	受容	聞くこと全般	CDをきいて、ものの名前と値段が分かる。	買い物
A1	活動	受容	聞くこと全般	相手が形容詞を使ってゆっくり説明してくれれば、それが何かを当てることができる。	
A1	活動	受容	聞くこと全般	CDを聞いて、人の名前や職業を区別することができる。	

3.2 目標達成のための授業活動

ここで「みんなの「Can-do」サイト」を利用して作成した具体的な学習目標をどのような授業活動すれば達成できるかを考えた。

まず、前作業と後作業で四技能を均等に伸ばす授業活動を考えた。教科書の中に同じテーマで同じような文法と語彙を使う読解・聴解・発話練習と作文練習がすでに含まれている。そこで、学生が弱いところがあれば、後作業で追加練習をする。例えば、教科書に家族を紹介する作文と友達を紹介する作文があるが、さらに知っている日本人を紹介するという作文を書かせた。実際、学生の大半は好きな歌手や芸能人のことを書いた。写真をつけたりする学生もいるし、書くスペースが足りないと訴える学生もいるほど、楽しく書いたようだ。

次に、学生の趣味と関係づける授業活動を考えた。教科書に京都旅行の内容があるが、日本国際交流基金が制作した「エリンが挑戦 日本語できます」の中学生の京都修学旅行のビデオを見せる。そのあと、京都の旅行経験や日本と香港の修学旅行の違いなどについて自由に話をさせる。実際、学生が覚えたばかりの語彙や母語を使ったりして、かなり積極的に話した。話したい内容があつてとても話したがるといい雰囲気です。授業が進められた。

最後に読解の活動として、読解ストラテジーを教えた後で、簡単で面白い文章を読ませることにした。未習の語彙に振り仮名と意味をつけたり、答えやすい質問をしたり、読む楽しさを覚えることを目指す。

上記のような授業活動を実施した結果、教科書に沿って学習目標を達成することができるだけでなく、さらに学習者の趣味や実際の経験と関係づけたことによって、学習者の勉強意欲が高まり、「読む」ことと「書く」ことも楽しめたようだ。

3.3 評価

「総合日本語1」コースの評価は持続的評価で、教師による評価と学習者の自己評価の二種類ある。教師による評価は宿題とクイズ、期末試験からなる。宿題は3回あり、学習した語彙と文法の復習と読解の練習などである。クイズは3回あり、期末試験同様、語彙と文法のテストで、読みと書きの基本的な能力を測る。

学生が作った文と作文を評価するときには、文法と語彙の間違い以外減点しないことにした。既修者は好きなように少し難しい文型と語彙を使って好きな内容を書くことができる。提出する前に先生に確認することもできる。既修者は授業の内容に拘束されずに、学習している内容より上のレベルのものを自分の意思で勉強することができる。

教師による評価のほか、学習者の自己評価を取り入れた。学習者の自己評価とは学習者自身がこの学習によって、何がどのくらいできるようになったかを評価することである。「みんなの「Can-do」サイト」を利用して学習目標と一致する「自己評価チェックリスト」を作成することができる。それを使えば、学習者が自分の日本語の上達をコースの途中や終りで確認することができ、ほかの人に伝えることもできる。学習の達成感、モチベーション維持にもつながる。最初は教師が目標欄の Can-do 本文を提示するが、慣れたあとに学習者が自分で新しい項目を作り、自分のできることをリストして評価することもできる。次の表 2 は宿題にした第1課から第7課まで勉強した後の自己評価リストである。

表2 自己評価リスト (第1課～第7課)

第1課から第7課までの勉強で、次のような目標をどのくらい達成したでしょうか。 自分でチェックしてみて、到達度の数字に○をつけてください。					
1 できない	2 あまりできない	3 すこしできる	4 できる	5 よくできる	
目標					到達度
友達や知っている日本人（国籍、性別、所属、性格など）を紹介する作文が書ける。 能够写简单文章介绍朋友或知道的日本人的国籍，性别，所属和性格等等。 【書く】					1 2 3 4 5
自分と家族のこと（国籍、所属、職業、年齢など）を紹介する作文が書ける。 能够写简单的文章介绍自己和家人的国籍，学校，职业，年龄等。 【書く】					1 2 3 4 5

短い形容詞文を使って、ものの形状や特徴を説明することができる。 能够用形容词句说明事物的形状和特征等。 【話す】	1 2 3 4 5
友達や家族の紹介(性格、好み、特技など)できる。 能够介绍朋友和家人的性格, 喜好和特长等。 【話す】	1 2 3 4 5
生活習慣(何をどのぐらいの頻度ですか)について話したり、聞いたりすることができる。 能够询问和回答同学的生活习惯(某些日常活动的频率)。 【会話】	1 2 3 4 5
その場にある身近なものの名前を聞いたり答えたりすることができる。 能够关于身边现存的日常事物的名称进行问答。 【会話】	1 2 3 4 5
簡単な表現でクラスメートを誘うことができる。クラスメートの誘いを受けたり、断ったりすることができる。 能够用简单的表达方式邀请同学或者接受及婉拒同学的邀请。 【会話】	1 2 3 4 5
簡単な説明なら、CDを聞いて、地図で場所を探すことができる。 如果是简单的说明, 能够听CD的录音, 在地图上寻找地点。 【聞く】	1 2 3 4 5
CDをきいて、ものの名前と値段がわかる。 听CD的录音, 能够明白事物的名称和价格。 【聞く】	1 2 3 4 5
形容詞を使ったヒントを聞いて、それが何かを当てることができる。 对方使用形容词慢慢地说日文的话, 能够猜测出对方说的是什么事物。 【聞く】	1 2 3 4 5
CDを聞いて、人の名前や職業を理解することができる。 听CD的录音, 能够明白他人的名字和职业。 【聞く】	1 2 3 4 5

4. おわりに

本研究では新しいコースのデザインに日本国際交流基金のJF日本語教育スタンダードを利用することを試みた。学習者のニーズに合う個々の授業の目標設定とOBTLに沿う学習評価、という二つの課題で非常に役に立った。JF日本語教育スタンダードを利用すれば、授業の具体的な目標設定、授業活動と学習成果評価の3つを一貫したものにすることができる。さらに、「みんなの「Can-do」サイト」というデータベースは目標設定や評価チェックリスト作成の際の重要な手掛かりになることがわかった。

コースデザインはコースが始まる前に決定している部分もあるが、学習者の要望や新しいニーズの発見、学習の進み具合などにより変更していく必要があると考えられる。筆者がJF日本語教育スタンダードを利用してコースをデザインした効果は、授業中の学生

の反応や授業に対する学生のフィードバックに一部現れている。今後、学生のフィードバックと学習成果を分析した上で目標設定や評価方法をさらに改善することが課題であるが、そのためにさらに JF 日本語教育スタンダードを研究し、コースデザインへの利用方法を検討したい。

【参考文献】

- 国際交流基金（2006）『国際交流基金 日本語教授法シリーズ1 日本語教師の役割／コースデザイン』ひつじ書房
- 国際交流基金（2010）『JF 日本語教育スタンダード 2010』国際交流基金
- 国際交流基金（2010）『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック』国際交流基金
- プーリク, イリーナ（2010）「一般成人向けの日本語コースデザインの改善－ノボシビルスク市立「シベリア・北海道センター」の場合－」『日本言語文化研究会論集』100, 6-20
- S. Koyama (2007) “J Bridge for Beginners Vol. 1”. Bonjinsha.

参考サイト

- みんなの「Can-do」サイト <http://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do>
- 小山研究室のサイト http://www.isc.kyushu-u.ac.jp/koyama_web/bridge.html

謝辞： 筆者が 2012 年に日本国際交流基金の教師研修に参加したことや国際交流基金海外派遣日本語教育専門家の木山登茂子先生と宇田川洋子先生のセミナーを受講したことが、JF 日本語教育スタンダードを利用することを試みるきっかけである。国際交流基金の先生方、特に「みんなの「Can-do」サイト」について特別講義をしてくださった古川嘉子先生に感謝したい。